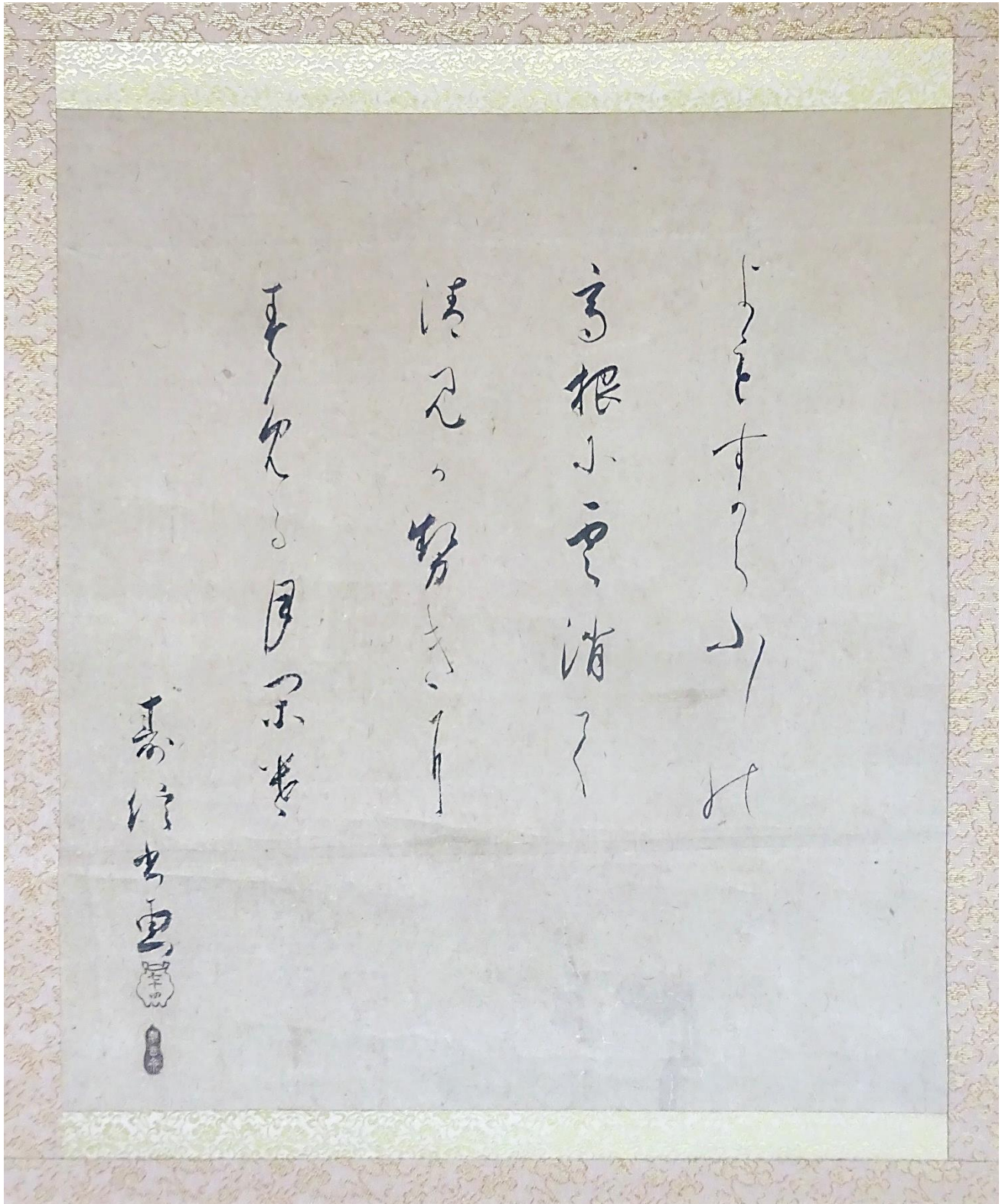


## くずし字にチャレンジ!

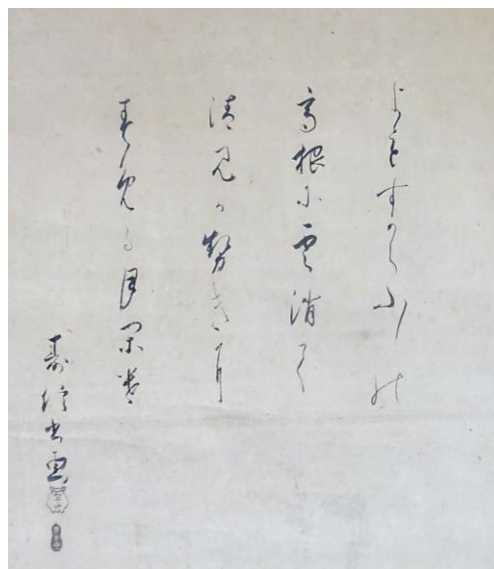
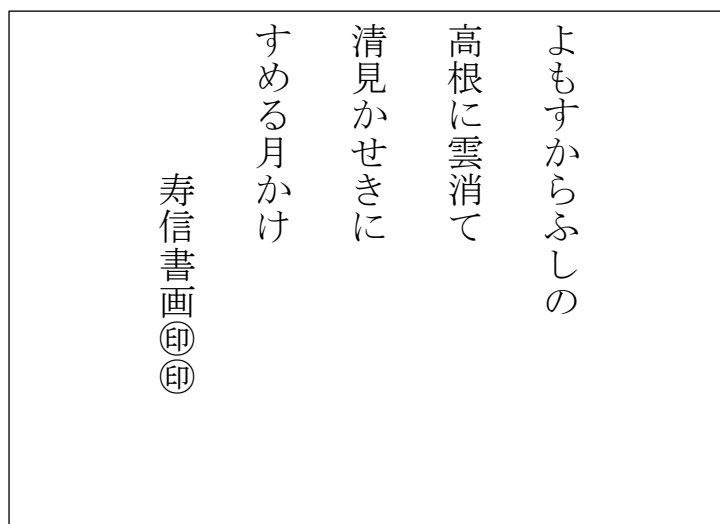
下の写真は、三咲の旧家で保管されていた掛け軸の一部です。

くずし字で書かれた「五七五七七」の和歌を、現代の文字に置き換えてみましょう!

(解答・解説は2ページ目以降です)



## くずし字を現代の文字に直すと…



くずし字を現代の文字に置き換えると、この掛け軸は、「夜もすから 富士の高嶺（たかね）に 雲消えて 清見が関（きよみがせき）に すめる月影」という和歌を、「寿信」という人物が書いたものであることがわかります。

この和歌について調べていくと、平安時代の公家である藤原顕輔（ふじわらのあきすけ）が、長承 3 年（1134 年）の歌合（うたあわせ）に出した、歌集にも収録されている有名な和歌だということがわかります。

「清見が関（きよみがせき）」は、現在の静岡県静岡市清水区興津の清見寺（せいけんじ）付近に所在した関所です。絵画の題材にもなっており、歌川広重「本朝名所 駿州清見ヶ関」には、富士山とともに清見が関付近の風景が描かれています。

## くずし字は難しい？

この掛け軸は、古文書講座のテキストとしては、難しい部類に入ります。ですから、「ほとんど読めなかった…」という場合でも、落ち込む必要はありません。

江戸時代を研究している専門家でも、古文書に書かれた文字を見て、その場で全ての字を現代の文字に直せることは、滅多にありません。その一方で、くずし字を読むことに不慣れな方が、1 文字も自力で読めない古文書も、滅多にありません。

くずし字を読めるようになるには、

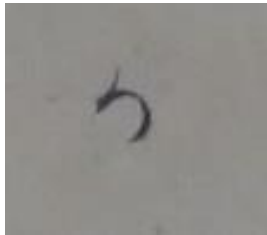
- 1 自分の力で読めるくずし字を見つける。
- 2 解答や解説を読んで、今度見た時に読めるようになりたいくずし字を見つけて、その字の覚え方を自分なりに考える。

これらを繰り返すことが大事です。少しずつ、読めるくずし字を増やしていきましょう！

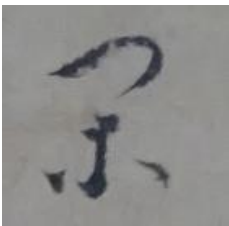
## 初級者は… 平仮名のくずし字に慣れましょう！

今回の講座でお伝えしたいポイントは、「平仮名はくずし字だと何種類もある！」です。

現在の平仮名は、「あ」は 1 種類、「い」も 1 種類…と全ての文字が 1 種類の字の形になっています。しかし、掛け軸を見ると、「清見か関」の「か」と「月かけ」の「か」は、同じ字には思えませんし、現在使われている「か」の形には似ていません。



「清見か関」の「か」 = 「可」



「月かけ」の「か」 = 「閑」

現在の平仮名の「か」は、漢字の「加」をもとにしています。ですから、上の 2 種類の「か」と形が似ていないのは当然です。かつて、平仮名の「か」として使われていた漢字は、「加」「可」「閑」「駕」「賀」「家」「歌」「哥」…など約 15 種類ありました。

現代に生きる私たちでも、紙に文章を書いたり、パソコンやスマートフォンで文字を入力したりする時に、平仮名を全く使わないことは至難の業です。筆と墨を使って文字を書いた昔の日本人にとっても、私たちと同じように（私たち以上に？）、平仮名は、生活に欠かせないものでした。

古文書を読み解くためには、平仮名を読めるようになる必要があります。ですので、同じ音（読み方）の平仮名に、どのような種類の書き方があるのか、覚えておくと良いでしょう。

それでは、掛け軸に使われている平仮名のくずし字が、現代のどの平仮名に対応しているのか考えて、答えを下の空欄に書いてみましょう（解答は 4 ページ目にあります）。

く ず し 字					
平 仮 名					

いかがでしたか？答えは、左から、「る」「き」「て」「ふ」「よ」です。

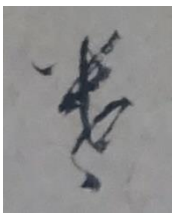
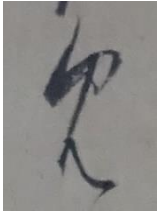
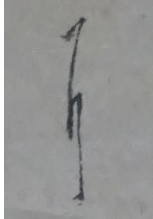
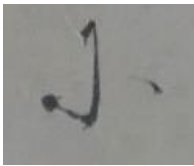
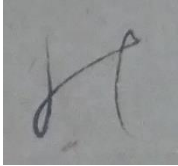
いずれも、現在使われている平仮名と形が似ているので、古文書を読むことに苦手意識があった方でも、読めた字があったのではないのでしょうか。ちなみに、これらのくずし字は、漢字の「留」「幾」「天」「不」「与」のくずし方と同じです。私たちが普段使っている平仮名は、1文字目がその音と同じ（同じ読み方をする）漢字をもとにしているのです。

### 中級者は… 変体仮名（へんたいかな）を覚えましょう！

さて、3 ページで紹介した「か」のように、平仮名 1 文字に対して、現在は平仮名として使われていない漢字はいくつもあります。そのような、現在では平仮名として使われなくなった漢字を、変体仮名（へんたいかな）と呼びます。

変体仮名を知らないと、くずし字が読めても、その字が漢字と平仮名のどちらとして使われているのかわかりません。そして、文意を理解することが難しくなってしまいます。変体仮名には多くの種類があるので、それらは、少しずつ覚えていくしかありません。

それでは、今日は 5 文字だけ、掛け軸の中で使われている変体仮名を覚えましょう。下の 5 文字の写真を見て、現在の漢字のどの字なのか考えて、空欄に書いてみましょう。

く ず し 字					
漢 字					

答えは、左から、「遣」（け）、「免」（め）、「耳」（に）、「尔」（に）、「能」（の）です。掛け軸の平仮名を、全て漢字にすると、左下ようになります。

寿 信 書 画 印 印	春 免 留 月 閑 遣	清 見 可 勢 幾 耳	高 根 尔 雪 消 天	与 毛 寸 可 良 不 之 能
----------------------------	----------------------------	----------------------------	----------------------------	--------------------------------------

寿 信 書 画 印 印	す め る 月 か け	清 見 か せ き に	高 根 に 雲 消 て	よ も す か ら ふ し の
----------------------------	----------------------------	----------------------------	----------------------------	--------------------------------------

## 上級者は… 資料の内容を掘り下げましょう！

これまでは、掛け軸のくずし字を現代の字として読み解く方法をお伝えしてきました。

上級者の方々には、1 文字 1 文字を現代の字に置き換えるだけでなく、読み解いた資料の内容や、その資料がどうしてできたのか、どう使われたのかといったことを考えて、船橋の地域史研究の面白さを感じていただきたいと思います。

そこで、今回は、郷土資料館の学芸員が、字を読んだ後に調べたことを、具体的にご紹介していきます。

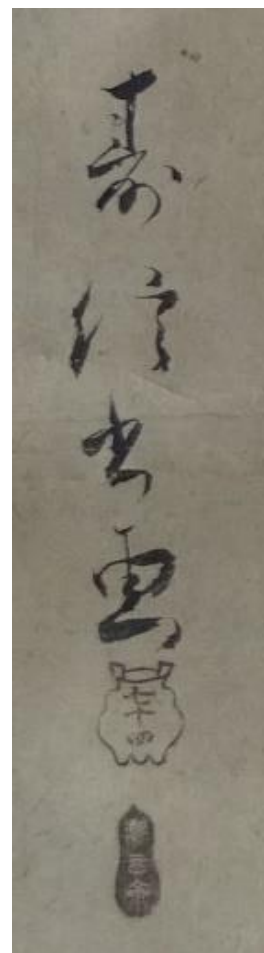
掛け軸に書かれている文字を現代の字に置き換えた結果、5・7・5・7・7 の和歌が書かれていたことがわかり、その和歌をインターネットで検索すると、1 ページで紹介したように有名な和歌だったことがわかりました。

次に、この文字を書いたと考えられる「寿信」という人物について調べてみました。「書画」と書かれているので、著名な書家か画家で「寿信」という人物がいるか、インターネットで調べると、狩野壽信（かのう・としのぶ）という人物がいたことがわかりました。

ただし、これだけでは、狩野壽信が三咲の掛け軸の作者だとは確定できません。「寿信」という他の人物が書いた可能性があるからです。

実は、掛け軸全体を撮影した時の画像からは、字の下の印（落款）の文字を読み取れませんでした。そこで、画素数を上げて、再度掛け軸を撮影したものが、右の写真です。「寿信書画」の下に、「七十四」「潮音齋」という落款が押されていることがわかります。これらの情報と狩野壽信の関係を、やはりインターネットを使って調べると、狩野壽信は 1814 年から 1897 年まで生きていたので、74 歳で和歌を書いたとしても変ではありません。そして、「潮音齋」という雅号を使っていることから、彼が 74 歳の時、つまり 1888 年＝明治 21 年頃に書いた作品だと考えることができるのです。

ちなみに、この掛け軸は、次ページで紹介する三咲の原寛介邸の襖に描かれていた絵などを軸装したもののうちの 1 点です。「書画」と書かれているので、もしかしたら、絵とセットだったのかも知れません。



古文書を解読する時は、書かれた文字だけでなく印鑑の有無も表現します。4 ページ目の解答上のように㊦と書くことで、もとの古文書に印鑑が押されていることがわかります。印鑑の有無は、その古文書が原本なのか、それとも写しや下書きなのかということ判断する重要な情報になるので、古文書を読み解く際には、字だけでなく印鑑にも注目すると良いでしょう。

最後に、この掛け軸と、三咲の歴史との関係を考えてみましょう。

狩野壽信の和歌がふすまに書かれていた家に住んでいたのは、原寛介という人物です。原は、明治 2 年（1869）から始まった三咲の開墾事業を現地で指揮した人物で、明治 20 年代の資料には、自宅の周辺に桜並木を植えていた様子が描かれています。



明治 27 年（1894）『日本博覧図 千葉県之部 後編』より抜粋

上の鳥瞰図の中心に描かれている原の邸宅は、もとは、明治 3 年（1870）に建てられたと考えられる、三咲開墾の拠点（開墾会社・三咲会社）です。左右に走っている道は、現在は、舗装されており、左側に進むとアンデルセン公園、右側に進むと三咲駅の方に着きます。沿道に植えられているのは桜で、この桜並木は「三咲の桜」として観光案内などにも描かれており、東京から多くの花見客が訪れる名所になっていました。

三咲は、江戸時代には、「牧」と呼ばれる馬の放牧場で、明治 2 年 11 月に、初富（現鎌ヶ谷市）・二和に続いて、東京からの移民が到着し、開墾が始まりました。開墾には多大な苦労があり、当初は、暴風雨によって開墾に従事していた人たちの居宅（長屋）が何度も壊れたことが記録に残っています。

今回紹介した掛け軸のもとになった狩野壽信の和歌が書かれた（貼られた）ふすまが原の邸宅に置かれたのは、壽信が 74 歳になった年以降、つまり明治 21 年以降です。上の鳥瞰図に描かれているように、三咲が畑作農村となっていた時期と重なっているのです。

※ この資料についての質問がある方は、郷土資料館までお問い合わせください。いただいたご質問等を踏まえて、10 月 15 日以降、「ふなばし生涯学習チャンネル」に、解説動画をアップします。